

意見交換の概要 (平成 27 年 6 月 12 日(金)・東温市中央公民館)

1. コンパクトシティについて

先ほど少子高齢化問題の話があったが、私も先日、少子高齢化の話聞いた。いろんなまちがあり、若年層の女性が多いのは石川県と聞いた。ベッドタウンで若年層の女性が増えているということで、先ほど知事が言ったように、県も 25 年ぐらいたてば 105、106、107 万の人口と聞いている。このような中、先日新聞で見たコンパクトシティについて、どのようにお考えなのか、お聞かせいただきたい。

【知事】

コンパクトシティというのは 1 つのエリアで雇用、商業、経済活動、福祉、保育、病院などあらゆることを完結できることが条件になるんですが、その条件を満たされる場所がどれだけあるかという限られていると思うんです。例えば、松山市長だったときに松山の 52 万のあの規模でもコンパクトシティなんです。20 万、30 万くらいの規模があつて初めて成り立つ概念なのかなという感じはします。ただそれは 1 つの行政区単位で見る必要はなくて、周辺の広域連携の中で考えていけば、少しそのエリアは広がっていくのではないかと。例えば、松山、砥部、東温など、中予を全部合わせて 67 万ぐらいたと思います。そのエリアで考えるというのも 1 つの捉え方だと思います。なにも合併ありきではなくて、広域的な分野ごとの連携は十分に可能だと思います。救急体制はどうすればいいか。平成 15 年にどうしてもつくりたかった事業があつて、それは子どもの 24 時間、365 日小児救急医療体制だったんです。実は、これは不可能だと思っていた、そもそも小児科の先生がいないんです。当時、松山市には、小児科の先生が 60 人ぐらいしかいなかったんです。これでは無理だと。その体制をつくるのに、最低 110 人が必要だったんです。中予に広げたら 70 人ぐらい。それでも足りない。大きな病院がありましたからその先生にも声を掛けて、やっと 100 人近くになった。でも足りない。諦めかけたときに、日赤の先生が県外の日赤の先生を引きずり込もうと。早い者勝ちだつて松山市に引っ張ったんです。それで 120 になったので、365 日 24 時間できたんです。ただ、これは松山市だけではなくて、周辺もどうぞということで、連携するようにして、東温市や松前町からもそこを利用されていますし、そういう形で分野ごとにやっていくことを積み重ねることが、最終的にコンパクトシティの概念につながっていくのではないかと思います。行政単位でコンパクトシティというのを最初からドンとやってしまうと、連携が希薄になる可能性があるんで、どっちがいいのか分からないところはありますが、僕は無理に 1 つのエリアで何もかも完結してほかの地域の人には使っちゃ駄目とか、ギスギスしたやり方よりは、今言ったような広域での捉え方をやれるところはやっていく方がいいのではないかと考えています。

2. 自転車道の周辺施設等への案内表示について

愛媛県の観光振興としてサイクリングを取り上げているが、当初、私もサイクリングはあまりイメージが湧かなかつたが、県の取り組みが始まり、知事がジャイアントを今治に誘致したため、今治に行きジャイアントの高級自転車をレンタルした。しまなみ海道を走り、自転車のイメージが全然変わった。非常に素晴らしく気持ちよかつたので、今はサイクリングが本当に好きになった。競技には出ず健康的にたしなむ程度であるが、今年から県の支援で J R や伊予鉄道にも自転車が乗れるようになり、横河原線も幾つかの駅で週末に乗り降りできるようになって、楽しみの幅が広がった。せつかくこういう状況ができたので、私たち経済団体としても、こういった活動に積極的に参加し、地域の観光振興にどんどん役立てていきたいと思っている。

東温市内の県道の松山川内自転車道が重信川沿いにある。松山市から東温市の重信川沿いで、非常に安心で安全で気軽に走ることができる身近な自転車道であるが、これをもっと気軽に市民が憩いの場として活用できるような自転車道にできないか。トイレ、駐車場、公園が周辺にあるが、アクセスの案内等もなく自転車道周辺の地域への誘導策も不足している。今後、県が取り組む愛媛県全体の自転車道への地元への観光振興策はどういうものなのか、お聞かせいただきたい。

【知事】

そもそも5年前にこの自転車の振興を考えたときは、漠然としたものだったんです。公約の中にも、ともかくしまなみ海道は3本の橋が架かっていて、唯一自転車の専用道があるので、これを生かさない手はないと思って、漠然と世界へ発信と書いたんです。そこからのスタートです。仕事をいただいたときに、世界へ発信と書いたので何とかしないとイケないということで、一番手っ取り早いのは世界一の自転車メーカーとタイアップすれば、そのネットワークを無料で活用して一気に世界へ情報発信ができるのではないかとという単純な発想だったんです。どこの会社かも分からないので調べたら、日本のトップメーカーが年間60万台つくっていて、今のお話にあったジャイアントは年間600万台つくっていて世界一のメーカーです。とりあえず行ってみようかと飛び込みで行ったのがスタートです。そこで創業者の方と出会って、根本から考え方が変わったんです。どういうことかという、自転車新文化という考え方を議論したんです。日本人は、自転車を通勤、通学、買い物の移動手段として捉えている方が大半だと思うんです。ところが今、世界の趨勢はガラリと変わってしまっていて、自転車というのは使い方を換えれば人々に3つの物をプレゼントしてくれる。その1つが健康です。次が生きがい。次がそのネットワークを通じた友情なんです。これはマラソンとも全く共通した要素なんです。10年前の市民マラソンは、誰が走れるものかと、あんなものは特殊な人がやる話だとほとんどの人が思っていた。今は市民マラソンは1,800もあるんです。要素が全く一緒なんです。健康、生きがい、友情です。そこにいち早く気付いた欧米、アジアの国々で今、自転車がものすごく増えているんです。この主役は若者ではありません。台湾に行くと、50代、60代の方々が主役です。その年代の方々がヘルメットかぶって、ロードバイクやクロスバイクに乗ってスーツ着て、そこら中、走っています。夜中も走っています。やがて日本にもこの文化は来ると思っています。その考えをしっかりと受け止めた上で、本格的な取り組みに入ったんです。目標を立てました。第1弾が4年間でしまなみ海道を世界のサイクリストの聖地に、これは1番の目標です。今、追いかけている目標が、愛媛県をサイクリングパラダイスに。その次の目標は、四国をサイクリングアイランドに。この3段階で組み立てを行っていきたいと思っています。第1段階のしまなみ海道をサイクリストの聖地というのは、去年の大会でその目的はある程度達成することができました。世界中に広まって、今、週末になると外国人がどんどん来ていますから。しかも去年、アメリカのCNNという放送局が選んだ世界の7大サイクリングコースの中に、日本で唯一しまなみ海道が選ばれました。それぐらいサイクリング好きな人に世界中で認知されるようになっていきます。ジャイアントは世界に支店を持っていますが、創業者の命令で全支店にしまなみ海道のポスターを貼ってくれています。こういうことをやると、いろいろな人に広がり伝わっていくんです。あくまでも今治が中心ですが、それはしまなみ海道は特殊なコンテンツなので、人を惹き付けるには一発目にはいいなど。これが終わって、第2段階の目標、愛媛をサイクリングパラダイスにするために、全市町を網羅したコースを設定しようということで、プロの方々の協力を得て、現在26のコースを愛媛県下につくりました。とりあえずコース設定です。そのうちの11のコースはプロ仕様、あとの15はファミリー向けのコースで、短めで誰でも走れるようなコースに設定にしています。このコースを設定したことによって、整備を行っていく必要がある。本当はお金さえあれば専用道をつ

ばいつくつたらいいけど、そこまでのお金はないので、とりあえず安全対策に力を入れつつ、今、お薦め推奨コースにブルーラインを引いています。ブルーのラインがどんどん増えてきていると思います。2年以内に26にコース全部引かれることになると思いますが、このブルーラインには二重の意味がありまして、1つはサイクリングやる人が誤ることなく、観光スポットを外さずに迷わずに進む道しるべという意味と、もう1つは車を運転している人に対して、ブルーのラインが引かれているということは自転車に乗る人が多いから十分に安全運転してください、というメッセージ、2つの意味を込めてブルーラインを設置しています。そのほかにも、この沿線でパンクしたときのお手伝いをするサイクルオアシス。これは認定すればいいんですけど、例えば、コンビニでもいいですし、自転車屋さんでも食堂でもいいです。有料でもいいんです。パンク修理をやりますというところがあればサイクリストは安心なんです。それから外国人を増やしていくとなると案内標識の問題があって、あるいは無料のWi-Fiスポットを増やせばいい。これは急ピッチで今増やしています。こうした仕掛けをしているところに、東京でたまたまある人に出会いまして、それは面白いということでぜひ我が社として全面協力したい、社会貢献事業としてやりましょうというところまでつくっていただいたのが、“愛媛マルゴト自転車道”というサイトマップです。(タブレット端末を見せながら)これもすでにオープンしています。どういうふうになっているかという、コースガイド。先ほどの26コースが全部出てきます。しまなみ海道だとかこういうページが出てくるのですが、まず一番上に書いているのが、こんなコースですという説明で、その下に地図が出てきます。その下に高低差が出てきます。これであとは自分が行けるか行けないか。その下にお薦めスポット情報が出てきます。この会社が全てのコースの動画を撮ってくれまして、あなたがここを走ったらこんな風景が待っていますというのをリアルタイムに動画で見れるようになっています。全ての市町がコースの中に入っていますから、それぞれのコースの画像が出てきます。これを一体幾らでつくったか、無料なんです。全部その会社が社会貢献事業として愛媛の取り組みは面白いということで協力してくれた。なんで社会貢献かと聞いたら、今、すでに研修に入っているのですが、これができた後のサイト運用管理を障害者の方々にお願いする、障害者の雇用につなげる場ということで、社会貢献できるということでやってくれたんです。ちなみにこれをやってくれた会社が日本マイクロソフトという会社です。こういう広がりが出てくるので、最初は何だろうと思われる1つの施策が、どんどん広がりをみせてくれることをぜひ知っていただければと思います。

今、言ったように地域につなげたいんです。ブルーラインは全市町に入ってきますから、それをどう生かすかは地域の方々が考えないと生かされないことなんです。ああなんか引かれたねって素通りしていったら、何のことにもしならないし、その地域ごとに濃淡が出てくるのは仕方がないかなと思っています。ただ、南の方のまちとか小さいところへ行くと、ともかくいろいろなことをやってもらっている。まとまりが強いですから、結構フル活用しています。だからぜひ東温市でもやっていただきたいと思っています。

そこで、さっきのサイクリングコースですが、調べないと分からないのですが、多分あの部分は県道ではなかった気がするんです。というのは、間違っているかもしれませんが、僕が昔、市長のときにあの道ができたんです。自分が市の事業でやった記憶があるんです。でも河川だから県だよ。県に来たときに、そのことを忘れていて自分であそこを走ったんです。一時は草ぼうぼうだったのご存じですか。なんでもったいな、何やっているんだと言ったら、それはそっちの話ですよって逆のことを言われたことがあるので、ちょっとどっちの整備がよく分からないんですけども。

(中予地方局建設部長)

県道で松山川内自転車道線として平成21年度に完成した自転車道線がございます。松山中央公園のところから重信川の上に向かって左岸側をずっと森松の重信大橋、赤坂泉の方を通過して、それから久谷大橋のところを右岸側に渡って、最後は重信川の横河原橋のところに出るというの

が県で整備した自転車道であります。今、知事が言われたのは、その対岸側、中央公園から海に向かって右側の川沿い。これが松山市道で、松山市がつくった自転車道線。この2つがござい
ます。そして、知事の言われたマルゴト26コースのファミリーコースで“水と緑の癒しのみち
コース”という形で26コースの中には、県が整備した部分を入れております。これは当然、知
事が言われたように、ここ2年ほどでブルーラインを引いて、案内標識の準備を進めております。
これについては、中予地方局でマルゴト自転車道の利用促進協議会で、ルートのどのような案内
表示をしたら効果的か、今現在詰めているところでございます。その辺の意見を聞きながら、既
存の泉とか公園をしっかりと案内できるような案内標識の設置に努めていきたいと思っております。
いろいろ意見等があればお聞かせいただきたいと思いますのでよろしくお願いいたします。

【知事】

ということで、それをどう活用するかということを地域でまた考えられたらどうかなと思いま
す。それを使っていろいろなイベント展開もできるわけですよね。そんなことをそれぞれの市町
ごとに企画していけばメッセージの発信につながるのではないかと思います。

2点あるのですが、観光地におけるそういったコースは、本当に他県から人が来やすいんです。
一番いい例なんですけど。でも、これはよく島の人たちも議論していたんですが、「自転車であ
ても素通りだ」という声があるんです。それは違うと。人が来るということがなければチャンス
は生まれません。少なくとも来るじゃないですか。来たら、今度は皆さんが努力する番で、来た人
に情報発信をしっかりとしてもらおうと。例えば、「ここへ来たらあの店に行かないと駄目だね」「あ
そこに食べに行こう。おいしいらしいよ」「ここまで来たらあのお土産は買って帰らなきゃ」と
いう、情報を皆さんが努力して発信して、キャッチされれば、人は止まって消費行動が生まれる
んです。指をくわえてじっとしていたら来ると思っていたら、それは大間違いですよ、というこ
とをよく言っていたんです。本当に今、そういう情報が上島町や今治市の島で活動が活発化して
いますので、そこが見えてきたなと思っております。

一方、こちらのコースはひょっとすれば県外の方々が気楽に来れる場所になるのではないかと
思います。これは台北市がすごくいい例ですが、台北市というのは、ちょっとそこまでは真似で
きませんが、河川沿いに160キロくらい自転車道があるんです。並行して電車が走っているん
です。サイクリストじゃないですが、どこの駅でも自転車を勝手に乗っけて降りられるんです。
その160キロの中で、今日は電車であそこまで行って、あそこを自転車で走ってみようという選
択ができるんですが、もう1つの驚いたことが、これはなかなか費用対効果、人口規模の問題が
あるので難しいけども、そこまで行ってしまうとお年寄りの方が乗っていますから、24時間走
っているんです。ナイターがついているんです。僕もうそだろうと思って、午前1時、2時にの
ぞきに行ったらみんな走っているんです。ここまでののかという状況にぼう然として帰ってき
ましたが、そこまでは無理にしても、何か気軽に安全に走れる場所がここだよというような売り
出し方があるのかなという気はします。

(参加者)

今の自転車道の件ですが、私もときどき利用するんですが、あそこの県道は車が相当走って
います。それを渡らないといけない。危険防止の対応策についてははどうですか。

【知事】

まず自転車の普及を図ることは、当然のことながら安全対策を並行して進めないといけないこ
とが大問題なんです。そこでまず、3年前に自転車推進条例というものをつくりまして、そこで
安全走行に関する啓発活動に力点を置くことを明記しているんです。それとハードの面。これは
県警にも協力をいただいて、全国で初めてバイシクルユニットという自転車部隊が愛媛県警に発
足しました。これは常時、特に子どもたちを中心に、学校を巡回して自転車の安全教室を365
日行ってくれています。もう1つは、ちょっと時間がかかるんですが、実は昨日も音楽を聞きな
がら自転車に乗っていた人が千葉県で人を引いて命を落とした痛ましい事故があったんですが、

愛媛県でも自転車の子どもたちの事故が今でも年間 200 件くらい発生しています。そのうち死亡者が残念ながら 2 人くらいいたのですが、ヘルメットさえかぶっていれば助かっているんです。100%とは言いません。でもほとんどが頭部の打撲によって亡くなられています。これも賛否両論ありますが、PTAと学校の先生に、最初は子どもたちから嫌がられてもヘルメットを着けてもらおうということで、今、普及活動をしている最中です。それをやるからには県庁の職員も自転車通勤者は全員ヘルメットをかぶってくれということで、最初調べたら県庁職員でもヘルメット着用率が 15%でした。途中、普及活動をして、さあどうだ、といったら 60%でした。そのうちレッドカードやイエローカードを出してもらって、今現在 100%になっているんですが、そういうマナーを普及させるには 1 つの考え方を提示しようということで、“シェア・ザ・ロード”という考え方です。シェア・ザ・ロードというのはどういうことかということ、道路はそもそも自動車だけのものではない、自転車だけのものでもない、歩行者だけのものでもない、みんなのものだから、お互いがシェアする気持ちを持ちましょう、という考え方を普及させましょうということが、遠回りだけど近道ということで、これに力を入れています。それからブルーラインについては、ある程度の安全性を見込みながらプロの目で交通量などを基に設定しているのですが、やはり例えばトンネルの道幅が狭いということはあるんです。トンネルはそう簡単にいじれないので、愛媛県のマルゴト自転車道の設定上にある県内の全てのトンネルに蛍光色の“自転車走行注意”というバカでかい看板を全県に設置完了しています。そういうやれる安全対策を限られた予算の中で実行に移しているのが現段階です。

3. 障害者スポーツ大会について

先日、県の障害者スポーツ大会で知事から非常に温かいごあいさつをいただいた。えひめ国体についても障害の方が頑張ったら参加できるんだと、今日は一生懸命頑張れといった温かい言葉だった。帰って反省会をしたが、知事のあいさつはうれしかったという言葉ももらった。今後、障害者の県の大会があり、障害者の国体がある。これに対する県の取り組みをお聞かせいただきたい。

【知事】

2 年半後に国体および全国障害者のスポーツ大会が開かれるのですが、数年前から準備をしています。特に全国大会のときに一番問題になるのはボランティアの方の確保で、これから呼び掛けを行ってどんどん増やしていかなければならない。それ以前の問題については順調に準備を進めていますので、この点をご安心いただきたいと思います。会場の問題、開会式の準備の問題、障害者の場合でしたら手話の方々の育成等々、3 年前の段階のスケジュールとおりに知っていることを知っておいていただければと思います。ただ、ボランティアはこれからの呼び掛けになりますので、恐らく 6,000 人くらい確保しなければできないと思っていますので、この点は学校などにも声を掛けて、例えばあまりいい話ではないですが、協力してくれたら単位の対象にさせていただくとか、そういったことも含めて呼び掛けを強めていきたいと思っています。

4. 障害者差別解消法の取組みについて

障害者差別解消法が来年施行され、県や市町村、会社などは特にその対象になるが、障害者差別解消法について、県職員や県に関係する方々への教育、研修等々をどのように進めているのか。いつ誰が障害者になるかは分からない、いつ事故に遭うかも分からない。障害者差別解消法の取り組みをちゃんと進めていただきたい。

【知事】

障害者差別解消法ですが、僕は障害者の差別とひとくくりに捉えていないんです。人権という観点からあらゆる差別というくくりで問題提起をしていかなければならないと思っています。それは同和問題、性差別もありますし、福祉施設におけるお年寄りへの対応問題、ドメスティックバイオレンス問題、マイノリティ問題、障害者の問題ももちろんある。根っこは特定のものだけではなくて、人間本来どこかに持っている残虐性の部分に一番の問題点がありますから、常に人権対応ということで、差別とは一体何なんだというところをしっかりと見据えて、例えば県庁だったら人権研修とか追加されています。もちろんそれを全員が受け止められているとは思いませんが、人間の織りなしている社会ですから、機械ではありませんので、そういったものが時折出てくるときはやはり「ここは違うんじゃないの」ということを言いやすい環境を整えて、修正をしていくことで対応していく必要があると思っています。

ちなみに、先ほど言いましたのは、より身近なところの行政の責任者としてやっていた松山市長時代の思いだったんですが、障害者福祉の問題というのは、3つのテーマでずっと捉えていたんです。1つはご本人の自立心をどう育てていくか。2つ目は特に子どもの場合、親御さんが自立をサポートしようとして外へ出す勇気を持っていただくこと。3つ目が一般社会の理解ということだと思いました。それをさらに深掘りして思ったのが、一般社会の理解が問題点の七、八割を占める。そこが普及すれば、そもそもの差別の問題は発生しないわけですから、そこに一番大きな課題があるなということは今も思います。

5. 「知事とみんなの愛顔でトーク」の冊子について

「知事とみんなの愛顔でトーク」という冊子を送っていただいたが、残念なことに図書館に行ったらこれがないという話も聞いている。市町の図書館に1冊くらいは欲しいと思う。

(広報広聴課長)

県立図書館や市・町立の図書館にはお送りさせていただいております。ただ、手づくりの冊子でございますから、置く場所もいろいろあるので、それは個々の広聴をされているところと連携して、なるべく見ていただけるような場所の検討をさせていただきたいと思います。よろしくお願いたします。

6. 東温市のまちづくりについて

東温市でアンケートが行われ、大人は、住みやすい、住み続けたい方が87.5%。まちづくりを進めていったときに行政が厳しい、市民が主導という項目があり、市民と行政が協力して一体となり取り組んでいきたいが64.2%。市政の目標としては、健康福祉が83%、快適環境のまちが78%、総合生活力のある産業のまちが73.8%。一方、子どもたちに将来も住み続けたいかという問いに対しては71.6%。大人も子どもも非常に愛着がある。その理由としては親しい友達がいるからが67.6%、生まれ育ったところだから愛着があるが65.1%、温かな環境であるが64.9%。子どもたちにどのようなまちにしたいかは、環境の景観美や住空間が安心ということ。2つ目は、生涯学習、文化、芸術、スポーツの活性化、3つ目は保健、医療、福祉の充実。

県でも先日、総合教育会議が行われ、東温市の要望に対し、学校、家庭、地域の連携が非常に大事だということが強調されていた。教育環境室に生涯学習の推進、文化、スポーツの振興が入るなど、東温市の子どもたちが望んでいることが入っているため、積極的な推進をお願いしたい。

今日、国土交通省の発表があり、全国で7カ所観光推進地域が指定されたが、しまなみ海道のサイクリングと四国八十八カ所が入っていた。国の要望もあり、資金面でカバーしてもらえるのではないかと。29年度の国体や11月15日の自転車イベントなど、グローバル化した社会で

あり、“みきゃん”や“バリィさん”の活躍が期待されている。同時に、私たち市民がどうしたらいいか。スイスなどへ行くと各家庭に花があり、木造のきれいなお家が建ち、ログハウスあり、素晴らしい花が至る所に飾られている。私たちが住んでいるところでも、自分たちのまちに合ったものを少しでも協力していくことが大事だと思う。環境と美化と整備に努めていきたい。

外国人にやさしい東温市、あるいは案内や公共の場の資料を作成し、外国人の方がホッとできるような自国の言葉で表現できればいい。また、おもてなしの心を私たち一人一人が持っていれば、何度も来ていただけることになり、産業の進展、活性化にもつながると思う。

【知事】

まちづくりの在り方について、行政と市民が一体となってという、これは本当にそのとおりですが、実は実際どうなっているのかというと、僕は松山市の経験しかないので東温市は分かりませんが、そのときはまちづくりは行政がやるものだと考える方がほとんどだったんです。行政もまたそんな感じになっていて、行政が示したんだからこうやればいいんだという姿勢が多かったので全部変えてしまおうと思ったんです。そもそも市民参加という言葉をやめようと言ったんです。なんで市民参加という言葉が出てくるのかというと、行政が主体だから市民参加お願いしますということにつながっているのではないかと。そもそもこれは逆ではないのかという議論があって、基本的には当たり前ですが、主役は市民、町民の皆さんですね。だから主体が市民、町民であるならばむしろ逆に行政参加でしょという発想だったんです。それを最初具体化させたのが、大問題になったのですが、今はきれいになっているんですけど、松山市のロープウェイ街の商店街なんです。就任したとき、あそこは汚くて、アーケードはボロいは、電線は上に張り巡らされているは、店構えはバラバラで、あんな小さなところですが3つに分かれていたんです。なんで3つに分かれているのかと聞いたら、「あそこの親父とあそこの親父は昔けんかして仲が悪い」とか、どうでもいいことで分かれているんです。そういうふうになってしまったら何が起ころかという、行政に対してここの地区はこういうことを要望する、ここの地区は行政これやれ、この地区はこれやれとバラバラなんです。今は相当弱気になっているんですけど、そのときは向こう気が強かったので言ったんです。こんな小さな通りでまとまりもなく勝手なことバラバラに言ってくる所に市民から預かっている税金はびた一文使わない、と言って予算をゼロにしたんです。2年間徹底的にゼロにしたんです。悲鳴上げて、「今度の選挙で絶対あいつは落としてやる」と言われました。それはかまわないと。間違っていることをやっているつもりはない。その代わり、皆さんが協力して自分たちが主役となって一生懸命やるというときは来てください。そのときは120%応援しますということをお願いしたんです。3年目についてまとまってくれて、みんなでやると言ってくれたんです。それは約束です。一緒に行政が参加してやりますと。ずっとワークショップなどを積み重ねて、ロープウェイ街が大改修になりました。何が起こったかという、工事が2年かかったんです。2年間、店の売上げは激減です。行政主導でやっていたら、「さあ、行政どないしてくれるの。あんたらが工事やったおかげで店の売上げ減ったろが、責任取れ」と絶対なるんです。誰も言って来なかったです。なぜなら、自分たちがやると決めたからです。2年間は歯を食いしばって、将来を夢見て頑張る。だから誰もそんなことは言わなかったです。2年後完成したときに何が起こったか。空き店舗がゼロになって、通行量が整備前の3.6倍になりました。その次にうれしかったのが、行政もここまでやってくれたから今度は我々がそれを活用する番だと言って、“門前まつり”というイベントを毎年やるようになったんです。これは補助金ゼロなんです。我々が自分たちのネットワークと自分たちの積立金とイベントで上がる収益で必ずやりきってみせると言って、以来、もう10年くらいたちますか、補助金ゼロでずっとやっている事業ですけど、どんどん空気が変わっていくんです。今でもロープウェイ街の

人と会うと「あのときお前はひどいことを俺たちに言ったな」なんて笑い話になるんですけど、そういうことから変わっていくのかということをおのとき体験しました。まちづくりというのは主役は市民、町民で行政参加というのが一番うまく結果が出る形なのかなということを感じました。

それから“みきゃん”は、今年の“ゆるキャラグランプリ”に昨日エントリーしました。去年3位になっています。1,700体の中での3位です。今年から“みきゃん”は愛媛県に申請していただいて、これはOKということになれば、無料で使用できることにしましたので、大いに活用していただきたいのですが、外に持って行くときも1位になったほうが価値が上がるわけです。ただ今回、相手が手ごわいんです。静岡県浜松市のキャラクターの“家康くん”と“ふっかちゃん”が出てくるので三つ巴の勝負になると思います。かなり頑張らないとグランプリがとれないので皆さんも応援していただきますようお願いいたします。ちなみに8月17日から92日間毎日毎日コツコツ投票していただくということが大事になりますので、1メールアドレスあたり1票。アドレスを3つ持っていたら1日3票入れられますので、ぜひお願いします。

最後にスイスのお話がありましたが、これは本当にまちづくりのいい見本だったんですが、元はオランダだと思うんです。オランダというのはチューリップの球根の根っこを押さえて、それを持って世界制覇しているわけです。改良に改良を重ねて、あの球根は1回しか咲かなくなっているんです。ですから未来永劫オランダから球根を買わないといけないう仕組みをつくって、あの国は花の1つの事業を確立したのですが、すごいと思うのは、今、おっしゃったとおり、スイスもそうですが花で売っているのだから国中そうするんだと。先ほどの自転車の啓発の問題もそうですが、気持ちが変わってきますから、家をつくるときに自分たちが楽しむ庭をつくるという感覚はないです。外の人に庭を見てもらって、その美しさを味わってほしいということを全員が家をつくるときにやるんです。だからどこに行っても、外から旅人が来ても、まちの人が歩いて、外から1軒、1軒の庭が楽しめるような家づくりをみんなが自発的にやっているんです。それは本当にいいところを見られたと思うのですが、そういうのはまちづくりの1つの原動力になることは間違いないと僕も思いました。

7. 自転車ルールの徹底及び保険の加入啓発について

6月1日に道路交通法の改正があり、自転車の取り締まりが強化された。それから2週間ほどだったが、自転車は車道を通行しなければいけないのに歩道を通っている状況で、法整備をしても住民や県民の心には届いていないと思った。傘を差したまま運転している人、また、愛媛大学と赤十字病院の間の道路を歩いていると自転車の人が後ろからベルを鳴らし「どいて」と言わんばかりに、道を開けさせられた経験がある。千葉県でイヤホンをした大学生が77歳の女性を死亡させてしまったという痛ましい事件もあった。愛媛県警としても自転車の法整備をしないといけないし、県としても自転車を運転する人に対して保険の加入をより一層促していただきたいと思う。私が中学生、高校生のときは、毎年、学校から自転車保険に加入してくださいというチラシがよく入っていたが、大学に入ってからはいったんチラシが全然なくなってしまったので、社会人や大学生にも自転車保険に入りましょうという啓発活動もしていただきたい。

【知事】

6月1日から県条例ではなくて全国一斉の法改正なので、大きく自転車の規制が変わりました。ご存じだと思いますが、3年以内に2度危険走行等々の摘発を受けると講習を受ける義務が生じます。この講習が大変なんです。3時間はみっちり拘束されます。行くといきなりレポートを書かされます。なぜ講習を受ける羽目になったかレポートを書かないといけない。それから3時間

みっちり講習を受けて最後は試験。試験を受けた後、最後に発表用の感想レポートをまた書きます。この講習が嫌なら5万円以下の罰金があります。それくらい面倒なんです。そんなことをやりたくなかったら安全に走りましょうというのが今回の趣旨なんですが、恐らく今の段階は警告前の警告くらいなのかなと思っています。6月1日から変わったからこういう乗り方をしてはいけませんよというチラシを配るくらいが、今の段階の県警の動きなのかなと思います。多分、ある一定の期間を越えたら本格的に警告を出し始めるので、その2回目は、全国一律の法律になりましたので、今言ったような義務が発生するというのを、1人でも多くの方々に浸透させないといけないなど。本当はペナルティで抑制をするというのはあまりいいことではないのですが、それくらい今、自転車のルールが悪くなっているのは事実です。どんなことが危険行為かということ結構単純なことで、傘を差す、アウトですね。それからかご以上の荷物を持って走る。ハンドルに紙袋を提げて走るのもアウトですね。基本的には車両ですから、一般道の左側を車と同じように通過しないといけない。場所によっては歩道はOK。でも歩道を走るときはベルを鳴らして歩行者をよけさせるのはアウトなんです。徐行しないとイケないルールですから。携帯で音楽を聞きながらもアウトですね。並走もアウトです。今だったら朝見られる光景が全部アウトなんです。早くそういうことを浸透させないといけないと思いますので、これは県警が中心の活動と、我々ができるとしたら保険も含めて学校関係もしっかりと対応していきたいと思っています。

8. 媛っこ地鶏の普及支援について

昨年度、久万高原町に道の駅がオープンした。清流米やトマトなどの特産品もあるが、その他の特産品が少ないので特産品の開発に力を入れている。自分は媛っこ地鶏を飼ってみてはどうかという勧めもあり、特産品を1つでも増やしたいと思ってやっている。

昭和50年代ごろまでは、久万の林業関係は日本でも三大先進地で、地域をリードするような特別な技術を持った方が数人いたが、現在、町を元気にするような方策がなかなかない。媛っこ地鶏は、中予家畜保健衛生所のご指導をいただき、戸惑いながらもいろいろアドバイスを受けながら1年たち、ようやく生産が追い付くようになった。現在は中予家畜保健衛生所が中心になり、久万高原町の特産であるトマトを材料にした餌を与えたり、町の特色を生かせるような努力をしている。さらに月に1度は、道の駅などで媛っこ地鶏の焼き鳥などを販売し、地鶏の普及にも努めている。

先ほどの知事の話の中で、特産品はできても営業力が不足しているということがあったが、そういう営業力も不足している。先日の民放のテレビを見ていたら、知事が県産品のPRをしていたが、ぜひ我々の媛っこ地鶏も加えていただき、愛媛県全体の媛っこ地鶏の普及にお力添えをいただきたい。また我々生産者も町の特産品として認めてもらえるように商品価値の向上など、いろいろ努力を続けていかなければならないが、卓越した技術を持った人のような知識がないので、引き続き県関係機関のご指導をお願いしたい。

【知事】

県の仕事というのは、品質、新品種開発も含めた生産のバックアップ、そういったところと、新たに導入したのが販売のサポート導入、2面のやり方が必要だと思っています。特に生産サポートはこれまでも長い歴史があって、考えてみると愛媛県の主力産業の大半は、愛媛県の技術職員がかなり力を入れて水面下で貢献をしていると思います。それは畜産、養鶏、柑橘、全部研究所があります。水産研究センター、林業研究センター、紙産業技術センターが四国中央市、繊維産業技術センターは今治タオルをバックアップしています。窯業技術センターは砥部焼、菊間瓦をバックアップをしています。そういう縁の下の力持ちの仕事が実は県の仕事でもあります。この媛っこ地鶏は加戸前知事のときに、養鶏研究所の職員が頑張って4元交配でつくられたとって

も肉質のいい、おいしさ抜群の県産品だと思っています。特に3年前の“どっちの料理ショー”で全国で最もおいしい地鶏に全国放送で選ばれてから一躍脚光を浴びることになったわけですが、恐らく今はまだ全県で6~7万羽くらいですかね。ともかく出荷羽数を確保しないと、売り込んだときに注文に応じきれないということがあります。ただし難しいのは、量を増やすことによって品質を落としてしまったら元も子もなくなってしまいます。特に媛っこ地鶏の場合、いろいろな食べ方で食べてみたのですが、110日ぐらいで出したものと、80日で出荷したものとでは別物になってしまうんですね。早く出すほうがコストが安いから収入は上がるだろうけど、ちゃんとした日にちを押さえて出したもの、これは間違いなく全国トップクラスになると思うんです。そこで商品としての信用が生まれたら、今の変動相場ではなくて、高値の固定価格で売るという手段で今後ともキープし続けることができると思うんですが、その品質の信用を失ったときに、価格下落のプレッシャーがかかってきますので、ぜひあせらずに品質にこだわって頑張してほしいと思います。その協力は惜しみなくやりたいと思っていますし、それからトップセールスも、あれは時間が限られていましたから、常に媛っこ地鶏も甘とろ豚も入れていますし、これからは今年の秋に生まれる牛の新ブランドも出します。これで牛、鶏、豚が全部そろいますので、3点セット攻撃を考えますから、ぜひよろしくをお願いします。

それから久万高原町には特産品はいっぱいあると思いますけどね。トマトを中心とする高原野菜のカテゴリーというのは、やはり魅力だと思いますし、量は少ないけれども久万高原の清流米というのは結構隠れた人気ブランド米になっています。やはり高原があるというのはブランドイメージがすごくいいなという気がするのですが、そこで“天空の郷さんさん”ができました。先ほどのまちづくりは地域住民が主役ということの典型が軽トラ市ですよ。あれは本当によく続いて、地域のにぎわいに貢献していると思いますし、今年はひな祭り。全国からおひなさまを無償で提供してくれということで7,000体くらい来たんでしょ。商店街の全部の家に並んだんですよ。圧巻です。ほかの国から見てもあれだけのことができるのは、まさに住民主役のまちづくりのいい見本だなと感じましたので、僕は久万高原町が好きです。

9. 砥部町への交通アクセスについて

砥部町への交通アクセスをもう少し充実できないか。レンタカーなど車でないとなかなか来ることができない。バスなど、特に、道後温泉から直接砥部町のほうに来ることができるという。夢のような話であるが、ライトトレインが将来できればいいと思っている。

【知事】

アクセスの問題というのは、なかなか難しい問題で、まず、電車は、昔の線路がなくなってしまったんで、これは何でだろうと正直言って思います。あれがあったら、総合運動公園なんかのアクセスも随分変わっただろうなと思いますが、そこを今から復活するというのは、一度廃線にしてしまってるので、並大抵なことではない。電車自体はなかなか難しいと思います。となると、バスということになるんですが、じゃあ民間のバス会社が常時運行するとなると、なかなかこれは採算の問題で難しいと思うので、例えば、道後温泉と砥部のまちツアーというのをセット商品にした土日限定・休日限定のバス路線の設定とか、そんなやり方もあるのかなという感じがします。そのときに、これはまちづくりとも連動してくるんですが、焼き物の窯元さんがいっぱいあるんだけど、行ったらもう一目瞭然で窯元のまちの風景がそこにはあるというふうな町並みができたら面白いなと思うんですけどね。その空間の妙こそが、人を惹き付ける新たなコンテンツになっていく可能性がある。例えば内子町の町並みとか宇和町の歴史の町並み、あるいは、大洲市の「おはなはん通り」なんか、その空間の雰囲気だけで人が来るんですよ。せっかく砥部焼というのがあるんだしたら、その空間の演出というものを今後の検討課題としてまちづくりの中

で考えられたら面白いのかなと思います。

10. 砥部焼の方向性の検討について

砥部焼協同組合理事長ととべりて代表から、知事には大変感謝していることを伝えてほしいと言われている。砥部焼は、「すごモノ」への掲載をはじめ、営業活動にも入れていただき、いろんな面でPRしていただいて本当にありがたい。とべりても知事のおかげで活躍の場を広げることができている。

砥部焼は、以前少し売り上げが下がってきたときからいろいろ考えないといけなかった。先延ばしにしてきた問題も今後立ち向かわないといけな。今、転換期にきている。この時期に中村知事が知事であることを心強く思う。今後、砥部焼がどうなっていくのか。長い目で見たときにどういう方向に進んでいくのか。砥部焼の手づくり・手仕事の良さをアピールするにはどういう方法がいいのか。ブランド化かもしれないし、もっと別のやり方もあるかもしれない、そういった大きな考えでいかないといけなと思っている。その際、窯屋だけではなかなかアイデアが出ないので、行政の方や専門家の方等と一緒にプロジェクトチームのようなものをつくって考えていくことはできないか。

【知事】

砥部焼は100人ぐらいの窯元さんがいらっしゃって、特に最近は若い方も増えている状況にありまして、砥部焼もある意味では変化の時期を迎えているのかなということを感じてきました。砥部焼というと、伝統的なちょっと厚手の白地の唐草模様、これが伝統的な砥部焼で、これはこれですごく自分もほっとするようなぬくもりを感じるんですが、最近は特に、とべりての皆さん、女性の方が増えて、随分とその枠を超える砥部焼というのが世に出てくるようになりましたよね。色づかいといい、薄さといい、デザインといい、おっと思うようなものが誕生しました。両方あって僕はいいと思うんです。2番目のこととつながるんですけども、大事なことは、砥部焼のポジションはどこにあるべきなのかというのをやっぱり皆さんがしっかりと議論をして、そこを共有しておく必要があるときを迎えているのかなという気がするんですよ。

勝手な意見なんですけども、明らかに世に言う信楽焼であるとか唐津であるとか伊万里であるとか、こういった芸術作品に近い焼き物とは違うジャンルにあると。手づくりで高級ですけど、使うものなんだというところが一番のポジショニングじゃないかなと思うんです。それがうまく伝わるような何か工夫が、砥部焼といえばそういうものだということが多くの方々に伝わるようなメッセージをどうすれば打ち出せるのかというのは、ちょっと今、答えはないんですけども、そこが鍵を握っているような気がするんですね。よく東京のデパートなんかに行くと、伊万里とかなんかでたらめに高いものがガラスの向こうに並んでると、そういうものでは決してないですから。今、仕掛けてる伊勢丹の話であるとか、こういうところでも買っていただくと。使っていたと。でも、手づくりの高級なものですよというところが一番いいメッセージになるので、その共有と打ち出しメッセージをどうすればいいのかという工夫をぜひ考えていただきたいなと思ってます。

それを技術的にバックアップするためにどういう形にするかは、まだ決めてないんですけど、これは、菊間瓦も含めての話になりますが、技術的なサポートをするための窯業技術センターのあり方をどうするかというのは、県の検討課題になってくると思っています。

古くからいらっしゃる伝統工芸士のような方も大事ですけども、より多くの人にメッセージを出すには、せっかくあれだけ若い女性がいらっしゃるんだから、ひとつ看板娘になって、砥部焼ガールズを結成したらどうかと、本当に無責任なこと言ったんですが、本当にそうやって、さらに、結成後はパフォーマンスをひとつ覚えてくれと。そのためには、砥部焼でハンドベルつくって、

みんなが音楽を奏でて、いろんなトップセールスの会場でメロディーを弾いたらいいんじゃないかなと言ったら、実際に本当つくってくれて、今はまだ練習中と聞いておりますが、前面に出ていただきたいなと思っています。どちらにしましても、この前の「砥部焼まつり」も、あれだけの人が来られるわけですから、ファンは多いと思いますので、自信を持って頑張りましょう。

1 1. 若者定住促進、雇用の場の確保について

昭和の合併は、働く人口が多い、少子化が進行する、また、高齢者が少ない時代、いわゆるボーナス人口が多かった。平成の合併以降は少子高齢化の時代、以前の総中流意識から現在の非正規雇用、国民の6割が生活が苦しいと感じ、地域福祉を推進するための国保、介護、後期高齢者医療負担等が国民の負担になっている。年金生活者は、老後の生活の不安を感じる方が多いと思うが、知事が言った、地域コミュニティ、NPO、ボランティア団体等と行政がタイアップして、共に地域福祉を推進していくという方法は、全くそのとおりでと思う。東温市の中山間地域は高齢化が非常に進み住民の流出によって空き家も増えている。こういう中で、そういうシステムができるのか疑問であるが、そういう地区でも住民が帰ってきて住み着いてもらえるような施策はないか。そこに住んでいる高齢者がいつまでも健康で早く介護にならないよう、健康を維持する施策も考えていかないといけない。地域の助け合い、包括ケアシステムがそういう地区にもできるよう、若者定住促進、雇用の場の確保をお願いしたい。県民が住み慣れた地域で安心して暮らせるようお力をいただきたい。東京都の高齢者受入れ地域の中に東温市も入ってと思うが、人口が増えるのはありがたいが負担増という懸念があるため、若者や企業が入ってくるような施策をお願いしたい。

【知事】

雇用というのは、本当に難しいですよ。つくったからといって、民間企業が成り立たなければ、その雇用は逆に失われていくわけですから、そのために何ができるかということ、例えば、地域ごとに合った企業の誘致。今年に入って、みんなが諦めていた地理的なハンディを持っている南予に3社誘致することに成功したんですが、それは職種を絞ったからなんですよ。南予というのは、あの場所にありますから、物流コストが高いわけです。だから、普通の企業はいくら呼び掛けてもまず来ない。何を呼び掛けたかということ、1次産業が中心のエリアなので、新鮮で豊富で高品質な一次産品をその場で提供できるということ、しかも、ニーズに合わせて供給体制をつくるということ売りにしたんです。宇和島に来たのが、日本最大の和菓子メーカーの工場。それから、2つ目が、松野町というアクセスが悪いところなんですけど、柑橘が化粧品にうまく使えるということで、京都に本社を置く化粧品のメーカーの工場。それから、3つ目が西予市、これはイモとか肉をその場でということで、日本一の冷凍コロッケの製造工場。今年に入って、3社決定したんですね。ちゃんとマーケティングをして絞ったら、今だと、可能性はゼロではないということを感じさせてくれた成功例だったと思うんですが、こういった県外の企業を引っ張ってくる、誘致によって雇用をつくり出すというのも1つの手法だと思います。

それから、もう1つは、さっきから申し上げている営業活動。売れないから企業の雇用が発生しないわけですから、売るお手伝いをする中で、企業が売り上げを伸ばし、そして、設備投資をして、雇用を発生させるという営業面のサポートというのが雇用を増やしていく2つ目の方策。

3つ目は、外から人に来ていただいて、いわゆるサービス産業の活性化に対応するビジネスをつくっていくという手法。

実は、もう1つあるのが、これは意外な側面なんですけど、農業なんです。農業というのは、厳しい厳しいという声ばかりが聞こえてきますけれども、場所によっては、ものによっては、成功している例はいくらでもあります。県内でもいくらでもあります。南予へいくと、何十人か雇

って法人化した会社が数億円の売り上げと数千万の利益を上げてるなんていう例も、現場でいくつか拝見させていただきました。ところが、農業者で共通していることは、これ不思議なんです。昔からそうなんですけど、もうかっているとき、もうかったとき、もうかったって絶対言わないんですよ。厳しいというときは、声を大にして言いますから、一般のイメージとして、農業というのは誰がやっても大変できつくてもうからないっていうイメージが定着してるんですよ。だから、若い人は絶対入ってこないんですよ。はなから選択肢から除外されてしまってるんです。でも、一般企業だったら、今年は「いいよ」って言うじゃないですか。例えば、サービス産業でも、「道後温泉は今年は夏休みも予約でいっぱいだ」とか言うじゃないですか。農業もちゃんと収益上げてるところが、「しっかりと経営成り立ってます」と、「将来が楽しみです」と、成功した人からどんどんメッセージを出していただいて、やられてる方が業としてのイメージを変えていかないと、若い後継者というのは絶対引っ張れないんですよ。でも、農業というのは、そういう意味では、今、某国の食の安全性なんかはものすごい問題になってるわけですよ。日本の食というのは、品質といい、安全性といい、世界一のレベルにあるわけです。当然値段では対等な戦いはできない。でも、実際、今、台湾にも輸出ルートが確立しましたので、台湾にハウスの愛媛の柑橘を持って行ってます。僕も売り場に立ちましたが、小玉の温州みかん、コストもかかりますけど、1個180円で店頭に並んでたんですけど、飛ぶように売れます。甘平なんかは、去年、マレーシアで試しにやってみたんですけど、1個1,200円で、売れるかなと思ったら、全部売り切れてしまう。やっぱり日本のものだと、間違いないという信頼感がものすごいあるんですね。業としてのイメージが変わることによって、若い後継者が入ってくる可能性は僕は十分あると思うので、今、申し上げた4つぐらいの例だけではないと思いますけども、雇用については力を入れていきたいなと思っています。

それから、もう1つは、元気な高齢化社会を迎えますから、健康寿命をどう延ばすか、これが大事なテーマなんです。本当に体の弱い人は病院に行ってくださいということになりますけども、できる限り病院以外の生きがいというものがあればいいなと。例えば、今やってるのが自転車なんですけども、東中南予で60歳以上の方限定でサイクリング教室というのをやってるんですよ。だいたい1カ所30人ぐらいなんですけども、皆さん初心者です。たまたま、先週、今治市の地区でやったときに行ったんですけども、60歳以上の男性・女性がみんな初めて乗るんですね。乗れるのかしら、あんな橋の上のスロープ、最高齢77歳でしたけど、上れるのかなとか言ってたけど、登れちゃうんですよ。びっくりしてるんです、みんな。それで、こりゃあ楽しいわいってね、半分以上の人が明日自転車屋へ行くって言ってましたから。やっぱりそこでまた趣味が生まれていく、そういうのも大事なことなのかな。

松山市長時代に、地域の空き店舗に地域の皆さんが主役になって何かやる場合はバックアップしようという制度をつくったんですよ。そこで生まれたのが「ふれあい・いきいきサロン」という事業だったんです。そこの運営は全部任せます。整備するときだけ補助するんですけども、あとは任せると。要はその地域のお年寄りが楽しく集える場所というのをつくるんですね。囲碁教室やったり、折り紙教室やったり、歌の教室やったり、それから、そこにドリップコーヒー置いてるんですけど、これは全部有料で、その収益が運営費になるという仕組みまでつくってるんです。第一号が松山市の小野地区の商店街のど真ん中にあるいきいきサロンなんですけども、いつも人でにぎわってるんですよ。健康な方なので、居場所を見つけたって感じになるんですね。そういうふれあい・いきいきサロン、今、松山市は290カ所に拡大しているはずなんですけども、そんな方法もあるんじゃないかなと思います。

12. 犯罪者等の公的機関での雇用について

平成29年にえひめ国体が実施され、県内外から多くの人々がやって来るが、安全で安心な地域

社会をつくるために、犯罪や非行をした人たちが社会から排除されることなく、社会復帰への再チャレンジが可能な社会をつくる必要がある。それには、雇用の場として公的な機関が保護観察中の人、犯罪や法を犯した人の受け皿にならないか。更生して新しく出発しようとする若者に、県などが公的な雇用機会を与えられるよう支援をお願いしたい。犯罪の6割が再犯者、有職者より無職者のほうが再犯率が高いということで企業にもお願いしないといけないが、公的機関で再チャレンジできるようお願いしたい。

【知事】

犯罪者の再雇用、これはできればいいんですけど、今、愛媛県自体が行政改革をとにかくやりきらないと乗り越えられない状況にあって、一般の採用もどんどん減らしている状況なんですね。それに従って国がばっさばっさ補助金切ってきますから、非常に心苦しいところがあるんですけども、そういう枠組みの問題、全体枠の問題で、なかなかプラスアルファの枠組みが確保できない。もちろん障害者の方はいって採用してるんですけども、これは去年議題になったんですけども、臨時雇用のところで何とかそういう枠を工夫しようねということにはなっています。それ以上に、さっきの問題と重複するんですけど、これも実は人権問題の範ちゅうに入ってくる話で、やっぱり人の心というのがいろんな再チャレンジの機会を狭めていく力にもなってると思うので、やっぱり根っこは人権差別の問題にあるのかなと思っています。

1 3. 移住促進及び棚田復活大プロジェクトについて

久万高原町の中津は、平成13年3月に、シンボルである中津小学校が閉校になったのを機に団結力がより強くなった。何とかしないと中津が消えるという危機感から始まった、「桜の里づくり事業」、今回の第14回植樹祭では、達成目標の40%にもなる2万本を植樹した。2009年「元気な集落づくり事業」に参加させていただき、今は公民館活動として、「中津大人の音楽学校」、「中津たんぼの学校」、「中津の食文化」この3本柱で活動している。

先日、中津の若者の集まった「若意志会」が「中津の未来を考える会」を開き、中津に住むことを諦めるのを回避するためにはどう動けばいいのかを議論した。この結果、幼児がいる家族の移住希望者を募ろうと。地域と一体となって、開放してくれる空き家を訪ね、住居としての程度の補修・改修が必要かを評価し、資材や労務費は、若意志が自分たちの力でできる限りの労力を費やし、どうしても補えない事柄を地元の大人たちに知恵を借りれば何とかなるかと。修理できた家に自分たちが住み、興味ある家族を招き、中津で移住体験ツアーを企画すれば、イベントとしても外から人を呼べるし、田舎暮らしに興味のある女性に巡り合える確率が高くなり、結婚問題に悩む中津の独身男性にとってありがたい話になる。

また、移住希望者の興味をそそるため「棚田復活大プロジェクト」を提案する。中津は、古くからおいしい棚田米が有名であったが、今は耕作放棄地に変わり、スギ・ヒノキが追いやられて、悲しい動きが出ている。少しずつ自分たちのできることを実現させることで、中津を背負う担い手を育成できると思う。移住促進企画と棚田復活大プロジェクトについて、何か良い知恵があればお聞かせ願いたい。

【知事】

この答えが今ここでぱっと出せば、全国の過疎地の問題を一気に解決できるということなんですけども、まず1つは、県で1つの集落ごとの事業を主導をしてやるというのはちょっと無理があるような気がするので、まずは、基礎自治体である市町でいろんなバックアップ制度を確立して、その中で県が何らかの関わりができるかという形でやるのがスムーズなステップなのかなという気はします。

その中で、例えば、移住、空き家対策だと、すでにやっている市町は結構ありますので、まずそういった情報をキャッチする。どんな仕組みになっているのか、先見的にやっていると、いろいろなやり方や制度があると思うんですけども、例えば、何日間か暮らすコースをいくらで提供する、そんなところも僕も県内で見たことがありますし、また、実際に来てもらったところについては、空き家の改造費をある程度町からバックアップする制度をつくったということも聞いたことがあります。そういったところをまず調べてみるというのが必要なのかなという気がしました。空き家を自由にとというのは、なかなか個人の財産というのがあるんで、とてもその入り口が難しいと思うんですけども、僕もそのような事業はあまりやったことがないので、どういうハードルを越えていけば可能なのかというのは、先進事例が参考になるんじゃないかなと思います。

それから、棚田は、これもどれぐらいの規模の棚田を想定しているのかによって、労力は皆さんがやられるとしても、燃料代とか、いろんな後の整備も含めて、どれぐらいの事業費になるのか、全然変わってくるので、そのあたりが見えてこない、なかなかどうすればいいというプランが出ないと思うんです。ただ、棚田では、先行しているところ、例えば、これは棚田でないんですけど、宇和島の遊子の段々畑とか、あと、鬼北にもあるんですけど、そこはやっぱりつぶし難かったんです。だから、きれいに守っていた。なかなか工夫してるなと思ったのは、遊子の段々畑では、イモを植え、地域の方々がブランド化したいも焼酎をつくってるんです。これを自然と食堂、お土産で今からの収益につなげていこうと、いろんな取り組みをやっている、そういうところも参考になるのかなという気がします。もう1つの鬼北では、明らかにその景観を売りにするということで、観光客を引っ張ってくるというところに活用している。地域によって、棚田の活用の仕方というのは随分と違うのかなと感じるので、これも参考事例があるんじゃないかなという気はしますね。

(参加者)

ありがとうございました。私のところの棚田は多分1,000枚以上ある、高低差でいったら、仁淀川から、子どもころに続いていた高さでいったら、200mから600mあたりまで棚田があったんですよ。夢の世界ですけど、もし進めていければ、観光にもなるし、おいしいお米がつかれるということで、移住者夫婦には魅力的かなと思うので、計画的に進めていくつもりです。ありがとうございました。

【知事】

最後に、僕は、久万高原町は、例えば、久万山五神太鼓なんかすごいなと思いましたね。それから、この前ちょっと畑野川へ行って感心したのが、かかし祭りってあるでしょう。行ったら、かかし大会ですよ。そこらじゅうにかかしがあって、毎年1回大会やってるでしょう。あれなんかも、やがて人を呼ぶコンテンツになるなど。そこから直瀬をずーっと走っていくと、一軒一軒の家に、あれは誰がつくってるのか分からないですけども、フクロウかなんかの木彫りの彫りものを全ての家の玄関の前に置いてあるんですよ。この風景だけでも圧巻でね。ちょっとした工夫でまちの魅力ってできるんじゃないかなと思います。

14. 地域の魅力と過疎対策について

私の地域は白猪の滝があり、本当に美しいところだと思ってる。この風景は、米をつくってできた風景であるが、米をつくり続けることが非常に困難な状況となっている。日本で最も美しくお米がおいしい村を目指している。地域資源の、白猪の滝、唐岬の滝は、夏目漱石や正岡子規も俳句や短歌を詠んでいる。松根東洋城が住んでいた一畳庵・惣河内神社、あじさいの杜、雨滝はおたたさん（魚売女）の雨乞い道中の終点であるなど、さまざまなコンテンツがある。

私どもの地域は5集落あるが、人口が600人、約100a、このうち3集落は子どもが一人もいない。地域の小学校全体でも今現在26人で、存続が危なくなっている。東温市役所や愛媛大学

付属病院までわずか15分なのに、不便だといって出ていくが、この美しく便利なところで地域づくり、地域が持続しなければ、日本中どこだって無理だと思う。

このような現状をつくり出しているのは一体何なのか、何が不満なのかといった現状を捉えておく必要がある。必ず持続できると確信してやっているが、そこには地域への誇りを取り戻すということが必要だと思う。米づくりにしても、若者が飛び付く魅力ある、あるいは、楽しく格好よい農業でないと持続しないのではないか。アイデアを出してそれぞれの地域で考えていくしかない。

県職員にもビジョンづくりやイベント、米づくりなど、支援をいただいているが、今後とも、地域のまなざし、人材育成、雇用の掘り起しなどを進めていただきたい。

【知事】

共通して言えるのは、実は、住んでいる方が灯台下暗しで、自分のふるさとの価値に気が付いてないケースが多いと思うんですよね。例えば、僕、松山市長をやったときに、「『坂の上の雲』のまちづくり」というものを打ち出したんですが、最初は誰も相手してくれなかったんですよ。「何でお前、そんな小説なんかでまちづくりやるんや」、「何をするつもりじゃ」と、最初のスタートはそんな感じでした。ただ、その中でも、コアになる人たち、その歴史を語り継いで一生懸命頑張ってきた方々がいらっしゃったので、そことタイアップして、県外で認められている価値がありますから、ここは踏ん張りどころだと、いいものは我慢し続ければ、やがて脚光を浴びるというのを信じていこうとやってたんですね。で、5年、6年たって、だんだん理解者が増えてきて、そのときに、ドラマ化が決まったんですね。ドラマ化が決まった瞬間に、空気が一変するんですよ。みんながみんな「いやあ良かったね、市長」、当時市長ですから、「『坂の上の雲』のまちづくり、わしゃ最初から分かっとったけん」と。いや違うと思うけどな。でも、それでいいんです。ふるさとの価値に気が付いてさえくれれば、そのエネルギーが外に向かって放たれ始めますので、それできっと気付ける情報発信力につながる。

僕がぱっと思い浮かべてるもの、さっき久万高原でお話しましたが、東温だったら、下林のコスモスの花が咲く風景なんかもきれいだし、上の上林のあたりも結構すごいきれいな棚田があったりそうめん流しもうまかった、昔、食べて記憶に残ってるし、あそこの下でイノシシ飼ってた人もいたな。あんまりいい記憶じゃないな。随分昔に行ったら、イノシシがちょうどとれて騒いでいたんですよ。僕は浪人中で、「おじさんどうしたん」と言ったら、「イノシシとれたんじゃ」といって、「お前誰ぞ」と言われたので、「誰々や」、「おう、今、苦勞しとるのう」と言われて、「いやあ、精つけないかんけんイノシシ食わしてやれ」と言ったら、「おう。今、さばいたばかりじゃけん、心臓食え」とか言って生で食べさせられて、「いや、これはいくら何でも、おいちゃん、食べれんで」と言ったら、「これを食べたら、次、応援したるけん」、「いただきます」といって食べた記憶があるけど、そんな思い出がありますよ。

当時、『坂の上の雲』のまちづくりをやってみて、それぞれの地域の良さというのは、やっぱり、浸透してないんだなと思ったので、実はこういうことやったんです。小学校・中学校って市町村ですから、小学校・中学校で「ふるさと学」みたいなのをやってくれるかなど。総合的な学習の時間を生かして、ふるさとの勉強をするようなことを考えたわけです。そのためには材料がいる、教材があるので、各地域の偉人たちの物語を一斉につくってみようと。でも、お金がなかったんで、学校の先生のOBの方々、辞められた方々に、「こんなこと考えてるんですけど、一人一物語で何か協力してくれませんか」と言ったら、「それはぜひやりたい」と全員ボランティアでやってくれまして、今、小学校向け、中学校向けに、ふるさと学、人物伝をつくったんです。それを地域ごとに渡してますから、そういうところから、自分たちの地域にはこんな偉人たちがいて、こういう歴史があつてというのを多感な青年期に知ってもらおうことが、ふるさとへの

愛着を生んでいくんだなということを感じたので、それはやられていいでしょうし、市町単位で提言されたら面白いんじゃないかなという気がします。それが結局のところは人づくりにもつながっていくんじゃないかなと思います。

それから、やっぱりちょっと高台の、水が多くて寒暖差があるところにおいしいお米が育ちますから、結構きれいな水ですと、アルプスのお米、愛媛県でつくるんだということなんですけど、みんなおいしいですから、自信持って競い合ったらいいと思うんですね。南予に行ったら、やっぱり三間米とか宇和米の人たちは地域のこだわり持ってますし、さっき言った久万高原清流米もそうですし、東予に行ったら、あそこは朝倉の人たちが「朝倉米じゃ」と言うしね、本当に全部おいしいんですね。共通してるのは、やっぱり地理的な好条件を持っているということが財産だと思いますので、ぜひ、決して安値で売らずに、ブランド米としていい価値を確立して、多くの方々に届けていただきたいと思います。

15. 6次産業農家に対する営業支援について

6次産業を目指している。久万高原町は夏、トマトがとてもおいしいので、そのトマトを1年中皆さんに食べてもらいたいという思いで、トマトジュースのほか、いろいろなトマト商品を加工している。つくるのは楽しいが、1次産業をしてる者は、売ることになると素人なので、とても販路、契約ということには至らない。また、契約しても長期間の計画的な取り引きができてにくい。手づくりは工場で流れるのと違い、1個の野菜つくるのに何回農家の手を煩わすか。種をまいて、間引いて、収穫して、それをきれいにして、持って行って売ると、何回も農家の手を通過しなければ市場に出ない。1つ1つ手づくりというのは、1本のジュースをつくるために、瓶自体でも三、四回、加工場のみんなと触って、思いを持って出荷してるが、なかなか販路開拓が難しい。今年で5年目に入るが、4年間、中予地方局や観光物産課の方などに商談会を紹介していただき、いろんなところへ行って、相談もさせていただいた。先ほどの知事の話にあった「営業本部」で今、話が進みかけており、とてもありがたいと思っている。先日ニュースで見たが、営業本部では水産物は何十億という計画だったが、農産物や加工品はニュースに出てこなかったの、多分少ないと思う。6次産業で加工している方々は、作業が手づくりなので値段的なもの、あと、輸送コストなどがあり、なかなか商談に至らないケースが多いので、営業本部等を通じて、ぜひいい取り引きができるようお願いしたい。

【知事】

その節はありがとうございました。本当においしいですよ。工場で実際どういうふうにつくられてるかも拝見させていただいたんですが、特に夏のトマトでつくったトマトジュースと秋採れのは味が全然違うというのにびっくりしました。それと、もう1つやめられなかったのは、トマトのドライフルーツですね。あれは食べた人はびっくりすると思います。それぐらい自信持っていていい仕上がりだなと感じましたので、商品自体にはぜひ自信を持っていただきたいなと思います。

ただ、やっぱり手づくりであるが故に当然コストもかかりますけど、いいものというのはある程度の値段は当たり前なんですけど、じゃあそういったものが量販店で売れるかといったら、量販店はむしろ安さを求めてくるので、そういうところは向いてないんだと思うんですね。やっぱりお店にもいろんなタイプがありますから、多少高くてもいいから、本当にここでしか出せない味とか品質、そういうものを求めているところも結構あるんですよ。営業本部はそこと結び付けていこうという考えで今動いてるはずですから、とにかく品質にぜひこだわり続けていただきたいなと思います。

あのとき、僕、秋が好きだと言ったんですかね。

(参加者)

そうです。

【知事】

それと、トマトピューレも、あれだけ丁寧につくられてますから、逆に言えば、輸送コストを考えると、やっぱり松山あたりの料理店というものが一番ターゲットになりやすいかなという感じがします。このような商品というのは、むしろ高級なものを扱うようなところを、県外も含めてアプローチをしていく必要があるのかなとそんな感じがします。

16. 松山市中心部商店街の活性化について

私は、標高 440m の山奥から松山市中心部の銀天街へ毎日仕事で出かけている。何で松山に住まないのかと言われるが、通勤の 1 時間で気持ちを切り替えている。嫌なことがあっても、それを忘れさせる景色であったり、四季を感じる田舎である。

産直をやっており、ほかの産直と比べると坪数も 13 坪と狭いが、6 年間やってきていろんなことに気付かされた。湊町商店街の周りはマンションがたくさん建っており、独居老人の方、高齢の方、転勤でお子さんを連れてる方などがたくさんいる。そういう方が、お子さんの送り迎えがてらに、お年寄りが病院の帰りがてらにと。八百屋であるが、先ほどの「ふれあい・いきいきサロン」のような役目を果たしている。誰も話し相手がないお年寄りが毎日買い物に来られ、片一方は草履、片一方はげたを履いていて、お財布がない、泥棒に入られたと。毎日話しているので、おかしいと思い、連絡先も分からず、いろいろと尋ね、警察にもお世話になって、最終的に息子さんに連絡を取ることができた。お子さん連れのお母さんも、松山に来られたときに、どういったものが一番おいしいとか、野菜を使った料理を教えると、こんな使い方があったのかと驚かれていた。そういったことをしながらここ 6 年間やってきた。野菜を売るだけでなく、違った役目も必要なのかとを感じる 1 年だった。

湊町商店街は空き店舗が多くなっているが、店を出すのに坪 1 万円と程度と高額であり、お店を出したい方はたくさんいるが利用できない。また、お年寄りが銀天街を端から端まで歩くと、かなりの距離になり、3～4 店舗歩くと荷物がたくさんになるが、うちの店では荷物をお預かりして階段に置いている。荷物を置くと、違うところでまた買い物ができる。休む場所、荷物をお預かりできる場所があるといいのにといった話を商店街で何回もしている。

松劇のところから当店まで屋根がなく、土砂降りだと、銀天街を傘なしで歩いてきても、松劇のところまでは傘をささないといけなので、お客さまのお忘れ傘を貸し、差しかけるということは何度もやった。また、商店街のお客さまのお忘れ傘をお預かりし、アーケードのないところで傘をお貸ししている。

行政の力を借りなくてはいけないところはお知恵を借りるが、自分たちができることは自分たちでやろうと、商店主に問い掛け、商店街を使って運動会をやらないか等、案を出す、「うん、いいね」で終わっている。何かいい形で商店街そのものを利用していろんなイベントをやりたいが、どういった窓口があるかお教えいただきたい。

【知事】

ぎんこいはもう 6 年たつんですか、早いですね。また、映画のときには大変お世話になりました。ありがとうございます。あそこで撮影させていただいて、一緒に出させていただいて、ありがとうございます。

商店街の対策というのは、どこの街でも大問題で、当然のことながら、その背景には、やっぱり車社会の到来に従って、郊外店ができて、さらには、巨大なショッピングモールが誕生するという時代の流れの中で、商店街のお客さんが減少してきたという背景があります。県内でもそう

なんですけども、全国どこでもそうですね。中心市街地の活性化というのは、本当に頭が痛い問題です。県内だったら、今治の商店街もしかり、西条の商店街もしかり、新居浜もしかりなんです。ただ、まだ松山の中央商店街は、可能性は残っていると思っています。

1つは、さっきのロープウェー街がああいう形でひとつよみがえったというのもありました。松山の場合は、ロープウェー街の並びが大街道になってるんですが、大街道の最大の弱点は、そこで住みながら商売をしてる人がほとんどいないこと。ともかく貸して収入があればいいという人たちの集団になってしまったので、カラオケボックスかパチンコ屋かファーストフードしかないんですよ。だから、商店街としての魅力がなくなってしまうている。広いスペースがあるというくらいですね。ただ、湊町のほうまで行くと、まだ地域の商店街という色が残ってますから、そこは本当に大事にしてもらいたいなと思いつつも、ここ数年、空き店舗が増えてきてるのがものすごい気になっています。

今の発想じゃないんですけども、僕、市長のときだったんですが、ライバルは郊外店であり大型ショッピングモールなんですよ。だったら、ここも大型ショッピングモールじゃないですかという発想に切り替えて、それまでは個人店主のある意味ではプライドを優先させるような運営だったと思うんですが、やっぱり共同ショッピングモールという考え方で物事を捉えていかないと、人はなかなか来てくれないんじゃないだろうかというような話をした記憶があります。例えば、こんな提案をしたこともあるんですよ。さっきの砥部焼じゃないですけど、道後の旅館街とタイアップをして、僕らが子どものころは商店街というのは浴衣がけの人が結構多かったんで、旅館の浴衣を着て来た方々は割引をするとか、そんなことで観光客対策をやったらどうかなと思ったので、伊予鉄に掛け合って、その運賃は期間限定で安くやりましょうという話がついたので、商店街にもっていったことあるんですよ。そうしたら、最初、若い人はそうでもなかったんですけど、上の役員の方が言われたのは、「我々は観光客には関心ありませんから」って一発で終わっちゃったんですよ。で、翌年になったら、その場所から補助金の申請が上がってきて、何だろうかと見たら、観光客対策なんですよ。ふざけないでくれと。去年、興味ないって言ってたじゃないですかと。そんな状況でした。でも、今、多分意識も随分変わっていらっしゃると思うんですね。まだそんな感じなんですけど。ぜひ、今が一番大事なときだと思いますから、やっぱり粘り強く、ぜひあの空間の、地理的には恵まれている、かつ、まだ個性が残っている、そういう中で、やっぱりショッピングモールなんだ、共同体なんだという意識を諦めずに言い続けてほしいなと思います。

それから、さっきのお忘れ傘の活用というのはすごくいい発想ですね。よくぞそこにいったなと思いますけど、結構皆さん協力はしてくれるんですか。

(参加者)

はい。

【知事】

ぜひ続けてください。ありがとうございました。